

2024年10月27日（聖霊降臨後第23主日、特定25、B年）
牧師メッセージ

「盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た」

（マルコによる福音書 10: 46-52）

司祭ヨセフ太田信三

十字架への道の途上、イエスは叫ぶ声を聞かれました。盲人の物乞いは誰からも卑下され、闇の中を生きていました。道の端に追いやられて生きていた彼は、そこから主イエスに叫び続けました。主イエスは闇に生きる者の叫びを聞き逃すことはありません。主イエスは叫びに応え、彼を呼びました。ここで使われている「呼ぶ」という単語の原義は「主に呼び上げること」だとされています。つまり、主イエスが彼を呼んだとき、彼の叫びは神へと上げられた、ということです。主イエスを通して届けられた彼の叫びを聞いた神は、彼の目を開きました。

それにしても、主イエスに呼ばれたときの彼の姿は想像するだけで鳥肌が立ちます。上着を脱ぎ捨て、躍り上がって彼は主イエスのところに来たのです。脱ぎ捨てられた上着は、それまでの彼の人生を表しているように感じられます。どれだけ嬉しかったでしょうか。闇から解放され、まったく人生が逆転する思いだったでしょう。目を開かれた彼は、喜びのうちに主イエスの十字架の道に従いました。しかも、新しい聖書では、「再び(・・)目が開かれた」と、ギリシャ語の原文に忠実に翻訳されています。彼が、もともと目が見えていたのかはわかりません。しかし、ここで確かに言えることは、闇へと追いやられて生きていた彼の命が、光の世界に再び生きるものへと変えられた、ということです。「あなたの命は不要だ」と思われていた彼でしたが、神は彼を不要などとはしていなかった。彼は自分の命が神に愛されていたのだ！という喜びと共に、再び神と共にある、祝福された命を自認して生きるものへと変えられたのです。

主イエスは「偉くなりたい者はすべての人に仕えなさい」と言われ、自ら十字架上で命をささげ、神と人との間を結びました。主イエスは神と人とを結ぶ祭祀として、そして執り成し主として十字架に上られたのです。その主イエスの執り成しにより、すべて暗闇に生きる人の叫びは神に届けられ、神はそれらの人々の目を開き、暗闇から解き放ってくださいなのです。

十字架の道の先には復活があります。死んでしまった主イエスが復活したように、暗闇に生きる人に光が、絶望に生きる人に希望が、主イエスの執り成しによって与えられます。これこそ、主イエスの死と復活にあずかるということであり、主イエスの十字架の道の先にある喜びです。目が開かれた男は躍り上がって、十字架と復活の喜びへの道を主イエスと共に歩み始めました。